G-9　（個人発表　6 月 13 日(日)9:30～9:55　N323 教室）

レジャーの＜徳性＞

欧州長距離歩道トレッキングあるいはサンティアゴへの徒歩巡礼を中心に

土井清美（東京大学大学院）

労働などの拘束的活動 (compulsory activities) よりも、いかに余暇（leisure）を過ごすかということに多くの意識を傾ける人たちがいる。しかしそこで追求されるのは、必ずしも３S (sun, sand, sex) にたとえられるインスタントな享楽でも、他なるものの見聞でもない。レジャーには、登山、ヨガ、水泳等の、よりアクティブな、時に真剣に営まれる身体活動も含まれる。本発表では、ヨーロッパにおけるトレッキングあるいは徒歩巡礼をこれらのアクティビティの延長線上に位置づける。そして、フーコー（1984）の『自由の実践としての自己への配慮』を手がかりに、制度的な領域から比較的離れた余暇活動に見られる、美徳、力強さ、勇気などが含み混ざったラテン語の*virtus* に関連する＜徳性＞が生成される過程を検討する。

ヨーロッパ各国を縦横に走る整備された欧州長距離歩道（European long-distance paths）のスペイン部分の徒歩道グラン・レコリド*Gran Recorrido* は、サンティアゴ・デ・コンポステラへの徒歩巡礼路 *El Camino de Santiago* と多くの部分で重複している。サンティアゴ・デ・コンポステラ（以下サンティアゴと略）は、スペイン有数の観光都市であると同時に、ローマン・カトリックの三大巡礼地でもある。興味深いことに、目的地への公共交通機関が整備されているのにも関わらず、20世紀後半以降、徒歩や自転車など動力を用いずにサンティアゴを目指す人が急増し、国内外でその徒歩道を愛好するアソシエーションが続々と設立され、関連するガイドブック、旅行記等が世界各国で出版されている。

本発表では、トレッキングシューズにザック、寝袋、ガイドブックなどを携えて、道中に点在する教会建築などを観光しつつ、グラン・レコリド *Gran Recorrido* あるいはサンティアゴ巡礼路 *El Camino de Santiago* のうち、平均一日20km～30kmの距離を約1 週間から1 ヶ月間歩く、各国からの個人「徒歩巡礼者」の様態を事例として紹介する。

サンティアゴの巡礼事務所では、ゴールまでの100kmを徒歩または馬で、200kmを自転車で到着した人に巡礼証明書 *Compostela* (または *La Compostelana*) を授与している。宗教的な動機でないことを自認するトレッカーの多くも、巡礼手帳 *credencial* を手に入れ、道中各ポイントにあるスタンプを集め、記念に巡礼証明書を受け取る。現在、サンティアゴ大司教区が発行するこの巡礼証明書には、「宗教的な動機」と「それ以外の動機」の２つの異なるバージョンがあり、申請者は、事務所にある記録帳の動機欄に印をつけることによって、どちらかを受け取る。教会側は、2000年代に入ってから導入したこの２種類の証明書によって、カトリック信仰者と、それ以外のスポーツ好きやロマネスク建築好きなどを振り分けることを目的としている。だが実のところ、歩く人の実践は必ずしもローマン・カトリックが方向付ける秩序や規範に晒されているわけではない。

すでに余暇・観光研究が十分に検討してきたように、余暇 (leisure) は、産業化社会において労働と共に産み出された近代的なシステムである。とりわけ近年では、余暇活動そのものがいかに産業システムの中に埋め込まれつつあるかについて広く議論されている。しかしトレッカー／徒歩巡礼者の実践に焦点をあわせる本発表が目指すのは、組織宗教や産業システムなどの制度や秩序からの解放、またはそれに包摂される抑圧・交渉のメカニズムからはずれたところにある、「徳性 (*virtus*) のようなもの 」が生成される様相を、事例を通して示すことである。

【レジャー、<徳性>、サンティアゴ・デ・コンポステラ、トレッキング、自己への配慮 】